

4 歯科保健教育による小学生の歯面清掃行動の変化 —新潟市立K小学校におけるデンタルフロスの使用実態—

本間和代, 小野真奈美, 天池千嘉子, 計良倫子

明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords : 歯科保健教育, 小学生, 歯面清掃, デンタルフロス

はじめに

わが国が2000年より展開してきた8020運動は着実に成果を上げ、平成23年歯科疾患実態調査において38.3%の推定値に達した。また、同年からの「健康日本21」の取組みテーマに「歯の健康」があり、目標項目に「歯間部清掃用具の使用の増加」が含まれ一定の成果が上がっている。現在の若者が将来8020を達成するためには、生涯を通じて8020を目指した歯科保健行動を実践していくことが重要であり、成人期・老人期に入ってから意識付けでは遅すぎる。そこで、永久歯に生え替わる学童期から8020を意識したう蝕や歯周病予防のための生活習慣の定着が望まれる。その手段の一つとして、近年、デンタルフロス（以下、フロス）の使用指導が注目されるようになり、我々も学校歯科保健において早くから取組んできた。今回、新潟市立K小学校におけるデンタルフロスの使用実態を調査し、今後の指導の在り方について検討した。

対象および方法

対象：新潟市立K小学校（江南区）に在籍する5・6年生131人（男：68人，女：63人）である。

方法：平成24年9月26日にK小学校全校児童を対象に実施した学年別歯科保健教育において、5・6年生の「デンタルフロスを上手に使おう」をテーマとした講話・実技指導後に、指導の理解度および家庭におけるフロスの使用状況についてアンケートを実施した。

結果および考察

1. フロスの操作困難部位（複数回答）および使用意義の理解

児童の操作困難部位は、上顎臼歯部が89人（68%）、

下顎臼歯部が40人（30%）と多く、フロス使用の意義については全員が「良く分かった」「分かった」との回答で、概ね理解したことが伺える。

2. 家庭におけるフロスの使用状況

使用状況は図1に示すとおり、現在使用中の者が42%と予想以上に多い結果で、小学生にはフロスの使用は難しく、指導を受けたとしても家庭で定着するのは期待できないとの我々の考えは当らなかった。



図1 家庭におけるフロスの使用状況 (%)

使用を開始した時期は3年・4年が多く、1週間の使用頻度は図2に示すとおり、毎日使用している者は少ないものの、定期的を使用していることが伺える。

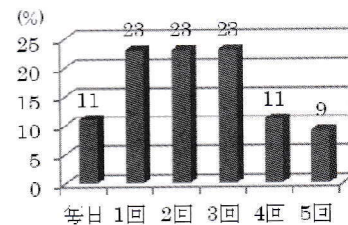


図2 一週間のフロス使用頻度

まとめ

フロス未使用者の94%が、今後使ってみたくないと回答した反面、使用中止者の理由は、「面倒くさくなった」「時間がない」が多かったことから、上級学校に進むにつれ、中止する者が増えることが予想される。その防止のためには、子どもだけでなく家族全員が使用する環境づくりと、8020を目指す意識付けのための定期的歯科受診の啓発が今後の課題である。